

■特集■

私のコレクション それは究極のこだわり、男のロマン

「一枚の絵はただの一枚の絵であるが、百寄ると美術館になる…」といわれます。今回登場の方々はただものじゃないコレクター、その奥深さを愉しむ達人でもあります。



至福の時を過ごせる私設「夢野球館」。鳥井守幸さん横がタバコカード

「僕から野球を取れば、何のために生きているのかわからない」というほど、根っからの野球好き。帝京平成大学教授の鳥井守幸さんは小平の自宅と離れたマンションに、野球グッズを蒐集した1室を持っています。名付けて「夢野球館」、時間と空間を超え、野球への夢に浸れる至福の場所です。

室内にはボストンレッドソックスのペナント、サインボール、古いカード、試合チケットなど数千点の野球グッズに、古今東西の野球本が並んでいます。その中でも、昭和21年春、戦後復活後初の東京六大学野球ガリ版刷りメンバー表や、英国で複製された1850年代の米国野球タバコカードは大変貴重なもの。当時、米国ではタバコの中にベースボールカードが入っていました。

目を引くのはポスター大のユニ

野球グッズが詰まった「夢野球館」

鳥井守幸さん

ホーム型紙。これは昭和20年代初期、雑誌「少年世界」の付録で、鳥井さんが大切に持ち続けている宝物です。物不足の時代、お母さん手作りの布製グローブと芯に小石を入れた手製ボールで、三角ベースに興じていた野球少年の頃。残念ながらこの型紙が現物とはなりませんでしたが、いつでもあの時代に還ることができる原点の品なのでしょう。

毎日新聞勤務の頃は社会部記者ながら運動部の手伝いもして、当時全盛であった西鉄ライオンズと読売ジャイアンツとの日本シリーズを取材。サンデー毎日編集長時代も野球特集を組んで、自分のコレクションカードを登場させたこともありました。野球人との交流も多く、松坂投手や往年の選手たちとのスナップ写真が部屋のそこそこ。無名の選手やコーチにも温かい眼を注いで応援し



およそ60年前の子供用ユニホーム型紙



昭和20年代の野球雑誌の数々

ます。故郷、福岡県大牟田出身の選手となるとさらにヒートアップです。

大リーグ、プロ野球に限らず、六大学、高校野球、ノンプロ、アジア野球、およそ野球と名のつくものは何でも見に行きます。昨年は西武ドームを主にして24試合観戦。

「球場で見ないとつまらない。電車を降り、球場へ向かう時のときめき感。試合開始1時間前には着いて練習を見ます。周りのファンのマニアックな会話がまた面白いんだよね」

コレクション、試合観戦に限らず、野球の歴史や文化など「野球」に包含されるすべてのものを愛してやみません。10年前有志と「野球文化学会」を設立し、もう9冊目の本を出しました。

「野球場の階段で、転んで死ぬのが本望」が口ぐせ。球春スタート、また心躍るシーズンがやってきます。



大リーグレジャー・ジャクソン使いかけの噛みタバコ(1984年)



(上) 待合室は昔懐かしい客車の座席 (右) 切符を切ってくれる日付入れ機 (右は昭和10年のもの)



小さい子ども喜んで散髪する駅長床屋さん

マニアも唸る、鉄道グッズ満載の床屋さん 渡辺和博さん

特急つばめのマークをつけた扉を開けると、まず目に付くのが、旧型客車シートの待合スペース。4人掛けで壁の窓も吊り棚もくず入れも本物です。そして数々の行先案内板や運賃表、運転席のハンドルなどあらゆる鉄道グッズで溢れています。ここが床屋さんだったこと、忘れてしまいそう。何だか懐かしい昭和レトロの世界に迷い込んだ気分です。

店主の渡辺和博さんが駅員の帽子とシャツ姿で迎えてくれます。店主ではなく駅長なのです。来店者には駅長自ら、昔の硬い切符を日付入れ機で切ってくれます。この店にあるものすべてが鉄道に関係したものだからお客さんも鉄道ファン、中には名古屋や長崎からやってくる客も、駅長のこだわりに共感して、自分の蒐集品を譲ってくれるマニアもいます。

生まれは所沢。何と家の裏には西武鉄道の車両工場がありました。毎日電車を見ながら成長した渡辺少年は、小学5年のときに夜行列車に乗り、福島まで初の一人旅。そして中学に入ると夏休みの度に、北海道へ出かけました。初めて鉄道グッズを買ったのも小学5年のとき。田端機関区の即売会で、小遣い千五百円をはたいて電圧計を買いました。以来27年間にわたって、コレクションを続けています。小さなものは旧型客



ご自慢の函館行き案内板



行く先々からパンフレットをもらい情報提供



外観もこの通り

車の窓のカーテンフックから東海道新幹線0系の窓のような大きなものまで。

「行先案内板でもどこを経由するかが問題で、函館行は山線を経由するものが古くて価値があるんです」と案内板を差しながら説明してくれます。男の子は小さいうちは皆、乗り物好きですが、大きくなるにつれゲームやスポーツに変わってゆくものです。その点、渡辺さんは生まれながらの筋金入り「鉄ちゃん」(鉄道ファン)です。

集めるだけではなく、線路をたどると果てしなくつながる風景や風土を愛しています。毎週木曜の定休日には奥さんと夜行日帰りか日帰りの旅へ。お客さんや仲間たちとは「つばめツアー」を企画。昨年の忘年会&クリスマスは「お座敷東金号」で、大晦日から元旦にかけては津軽鉄道

のストープ列車で五所川原まで足を延ばしました。乗車の楽しみとともに駅弁や土地のおいしいものを食べるのも目的。「箱根宮ノ下のワタナベカーリーのシチューパン、あれはおいしいですよ」耳より情報をゲットしました。

全国津々浦々、ほとんどの鉄道に乗った渡辺さんは子どもたちのためにも「つばめツアー」を春休み、夏休みに実施しています。鉄道博物館見学や北陸への「日本3大モグラ駅めぐり」など。

清瀬のこの場所に「BBつばめ」をオープンして3年。夢は鉄道車両本体を手に入れて、床屋をやること。バーバーつばめは本日も快走中!

(BBつばめ)

◆清瀬市松山1-46-30
☎042(492)8430



(右) 青海波文様が美しい、これは何？
(中央) 箱つきの亀甲模様の哺乳瓶
(左) 古き良き時代を生きたモノたちが今なお息づく部屋



ガラスの哺乳瓶に魅せられて、限りなく広がるビンの世界 鈴木昌和さん

上の写真は何のビンだかわかりませんか。ほとんどの方がわからないのでは？

これは明治時代から使われていたガラス製哺乳瓶なのです。小平市にある鈴木小児科・内科医院院長の鈴木昌和さんが蒐集したこれら模様の哺乳瓶はなんと400種類、千個余り。空き瓶集めを趣味とする人は多いのですが、この珍しい哺乳瓶をこれほど多く蒐集しているコレクターはいないのではないのでしょうか。

医院2階に瓶コレクション専用ルームがあります。いろいろな哺乳瓶だけではなく、ありとあらゆる種類の瓶が並ぶ中に昔の医療器具、木製の牛乳箱、粉ミルクの缶や乳首を入れた箱も見えるのは、小児科の先生ならではのコレクションは研究資料室のようなこの部屋だけに及びません。もっとたくさんのもので置いている部屋もあると聞き、一人で10年余の間に、これだけ集めた鈴木さんの情熱とエネルギーに圧倒させられました。

骨董との出会いは平成7年のこと。たまたま「骨董ぶらり旅」というテレビ番組を見ていて、「こういう世界もあるのか」と関心を持ちました。その後電車で出かけた折、「骨董まつり」ののぼりを見かけ、寄り道したのが「平和島骨董まつり」の会場。ここが現在の膨大なコレクション

ションの出发点になりました。

「骨董市で発見するまでは平底の哺乳瓶のことは知らなかったんですよ。以来哺乳瓶を探しに出かけて、なければ気に入った瓶を買って帰る、以前は月4回も骨董市へ出かけることもありまして。今の瓶は画一的ですが、昔は吹いて作ったので、このようにゆがみがあったり、気泡ができていたりします。味わい深く好きですね」

ビール瓶、洋酒瓶、牛乳瓶、薬瓶、インク瓶、首が長いミカン水の瓶、ビー玉やおはじきまで、ぎっしりと収納している棚やケースもほとんど骨董市で求めた古いものです。

「あれは何に使っていたと思いますか？これは何だかわかりますか？」と訊ねながら説明してくださる様子が本当に楽しそうです。

大きめのガラスフードのようなものは昔のハエ取り器。瓶の先につけ



哺乳瓶を手にした鈴木さん

た朝顔状のガラスは搾乳機。当時の庶民の暮らしを髪髻とさせる生活骨董の数々からは、作り手と使い手の温もりが伝わってきそうです。

部屋中央のケースの中にはメイソンコレクションの模様の哺乳瓶がずらり。カメの甲羅のような表面にはいろいろな模様がほどこしてあります。亀甲模様や桃太郎など、中でも美しいのは青海波文様のもの。鈍い光を放ち、そのまま芸術品として置物になりそうです。明治時代、最初に使われたガラス製哺乳瓶がこの形のものとなされ、床の上に置き、長いゴム管を通して吸わせていました。

小平医師会会長として多忙な現在は骨董市へ出かけるのは年に2回くらい。インターネットのオークションで探すのが常です。文献も収集中で、将来はぜひ本にまとめたいと考えています。



明治30〜40年代の信濃ビール



瓶のラベルに「理想的乳吸器」の文字が